

伝説・物語 ①

芦屋の七不思議

あしや子ども風土記

芦屋に伝わる伝説は、当時の人々が生活のなかで経験した不思議なことや悲しかったこと、うれしかったことなどを、その土地の山や水・塚・人物などに結び付けて伝えられたもので、歴史上の事実ではありませんが、

その時代の背景とともに事実のよくな話となって伝えられたもので、伝説のなかに、語り継がれた昔の人々の願いや物の考え方がよく出ていますので、現在の人々にも共感を呼ぶものと思います。

芦屋沖の竜灯



景色が見られました。浜の近くに住む村人たちは、この怪しい光を見ることに「あれは、海中の魚の群れが竜の神様をお祭りしているのじゃ」と語り伝えました。百年ほど前まで、時々現れたそうです。その後は姿を見せなくなりました。

今から三百年ほど昔の本に書かれているお話です。芦屋の浜で、真っ黒な夜に沖の方を見ると、海中のあたりこちらから、うつそくのあかりのような青白い光が現れて、風が吹く方向とは反対に連なって走る不思議な

★ノット 竜神は、水界と陸の境を支配しているといわれています。
★参考文献 『摂陽群談』元禄十四年(一七〇一)竜燈火
『摂津名所図会』寛政八年(一七九六)沖竜燈

打出沖の海鳴り

打出町の国道43号の北側に、阿保山親王寺があります。そのお寺の言い伝えでは、名高い阿保親王が芦屋の地に住んでいたことから、平安時代に親王寺は建てられたそうです。親王寺のいわれを記した文書に不思議なことが書かれています。

打出の沖を船が通る時は、必ず帆を下げて親王の魂を敬う気持ちを表さねばならない。もし、そのことを知らないで、遠い国

から来た船が帆を下げないで、行き過ぎると、海鳴りがして海上が大嵐になり、船が沈んでしまうというのです。
海鳴りは、津波や暴風雨などが来る直前に海上から聞こえてくる音で、波のうねりが海岸近くで砕けるために起こります。

★参考文献 『阿保親王寺縁起』江戸時代「二」にあやしきことあり、遠近舟のかすほくゆきかふに、この親王寺のまへをすくるときは、必帆をさげけるに、あなひしらぬ遠津国の舟人帆をさげざれば、其

金兵衛車やけ車



六甲山の南のふもと、帯は海辺に向かつて傾斜しています。この地形を利用して、東は武庫川から、西は生田川あたりまで、灘の酒米をつくる水車利用が盛んでした。

このお話は、芦屋の水車にまつわる若者たちの悲しい愛の物語です。

阪急芦屋川駅から川の右岸に沿って北へ行き、開森橋を過ぎると、やがて左城山・高座の滝」と記された道しるべがあります。ここから右への道をたどると、民家の石垣に六角形や丸形をした百あまりの石臼が並べられてはめ込まれていて驚かされます。この道をさらに進むと、広々としたえん堤へつながりますが、その右岸あたりが金兵衛車の小屋があった所と伝えられています。昔、芦屋川の水車谷には、十数輪の水車がコットン、コットンとまわっていました。灘の酒は、京都の御所や江戸の幕府へも納められるので、その大切な酒米を精米する水車小屋は、特別の扱いを与えられていました。

毎年、定められたころになると、酒米をつくるために、近くや遠くの村から選ばれた若者たちが、水車谷へやってきました。

ある年、城山のふもとにある金兵衛車と呼ばれた水車小屋に、丹波の村から選ばれた若者が来ることになっていました。若者には、ふるさとに愛する娘がいました。二人は、村の代表に「どうか、このたびの芦屋谷へ行くことをお断りさせてください」と願いましたが、「このたびのことは、一家の光栄であり、村全体の面目に関わることじゃ。心して仕えてくるように」といわれ、許してもらえませんでした。若者は、悲しい思いで娘と別れて水車谷へ行きました。水車小屋の主人は、この水車は、特別の扱いを受けていること、小屋へ入る前には芦屋川で体を清めてくること、特に大切な酒米をつかねばならないこと、仕事をしているときは誰とも無駄話をしないこと、米をつき終わるまでは、決して外へ出てはならないと、厳しく言い渡しました。若者は、愛する娘のことを思いながら、いわれた通り一生懸命に働いていました。

一方、娘も若者への思いを胸に抱いて過ごしていましたが、両親から他の家へ嫁入りするように責められました。娘は、悲しさのあまり逃げようとして、はるばる芦屋の里へたどり着き、金兵衛車の小屋を訪ねました。しかし、いくら戸をたたいても誰も出てきませんでした。ようやく小屋から顔を出した水車の主人に、若者に会えるように頼みました。主人は「酒米をつき終わるまでは誰にも会わせない。これがこの水車の定めじゃ」と、まったく取りあってくれませんでした。

舟にあやまちありとなくの尊蓋この地にとどまりまして物とくめし給へるにや」



●平成五年に発行した「あしや 子ども風土記」ここでは、発行当時の原文に近い状態で引用しています。



★ノット 芦屋川水車絵図(安政四年一八五七)には、十数輪の水車が描かれている。芦屋付近から西の一带を指す地域は灘目と呼ばれ、江戸時代から急流を利用して酒造用の精米や菜種油絞り、小麦粉を使ったそうめん作りなどの水車産業が盛んであった。この伝説は、静かな田園風景を背景にした地方色がよく出ている。
★参考文献 『六甲』昭和八年、竹中靖一著 伝承による。

その後、娘は何回も小屋を訪ねて訴えましたが、若者の姿すら見ることもできず、ただ水車の音が聞こえるだけでした。日の落ちた城山の山道を行き来するうちに、娘の着物は破れ狂ったような姿となり、村人にも異様な姿に見えるのでした。六甲の山が濃い霧に包まれたある夜のこと、娘はどこからか折ってきたサカキの枝を手に持って、金兵衛車の前に立ちました。もはや娘の優しさは消え、髪は乱れて目はらんらんと輝き、恐ろしい姿となって若者の名を呼び続け、呪文を唱えながら水車小屋の周りを駆け巡るのでした。そのうち、娘の体から怪しい青白い光が出始めたと思うと、大きな炎となって空高く舞い上がって行きました。

その夜、金兵衛車は小屋ともども焼き尽くされ、水車の主人も若者も再びその姿を見ることはありませんでした。

このことがあってから村人たちは、この水車のことを「金兵衛車やけ車」と呼び、子どもたちも「金兵衛やけ車」と歌うようになったということです。

シリーズあしや子ども風土記

■シリーズ「あしや子ども風土記」は、美術博物館・市役所売店で販売しています。



第1集「伝記・物語」・第3集「植物のかんさつ」・第4集「小さな生きものたち」・第5集「文学さんぽ」と第9集「写真で見る芦屋今むかし2」は各冊400円。第6集「芦屋の地名をさぐる」・第8集「描かれた芦屋の風景」は各500円。
第2集「歴史さんぽ」・第7集「写真で見る芦屋今むかし1」は完売しました。

問い合わせ 美術博物館 ☎38-5432

●「広報あしや」バックナンバーは、市ホームページ『広報あしやON LINE』でご覧いただけます。

サラ金・クレジット問題でお悩みの方、完済された方 広告

～任意整理と過払金請求交渉は着手金無料～

- ◎「任意整理」という方法は、取引が一般に7年以上あれば、借金がかなり減額できる可能性があり、場合によってはお金が戻ってくる可能性があります。(過払金)
- ◎完済されている方でも過払金が生じていることがありますので、完済から10年たっていない方はぜひご相談下さい。

費用分割可

認定司法書士に債務整理を委任すると、業者から本人への取立は止まりますので安心下さい。

甲東園法務司法書士事務所

完全電話予約制 0798-54-3259 ■電話受付時間：平日9時～18時
阪急今津線甲東園駅徒歩2分 / コインパーキング(有料)が近くにあります。